

<講演>山上国際学寮

はるばる日本へー あおい目が見た Zen

ネルケ 無方

皆さん、こんばんは。ネルケ無方です。きょうは「はるばる日本へー あおい目が見たZEN」という題名で話をさせていただこうと思います。スライドを使って話を進めさせていただこうと思います。

私が生まれたのは、まだドイツが東西に分けられていたころ、1968年の西ベルリンです。まだ壁があったころの西ベルリンに生まれました。私がまだ半年のときに、親は西ドイツにある私の母の実家に引っ越しました。実は母の実家は、この写真に映っている古いプロテスタントの教会でした。私の母方の祖父は牧師だったのです。私も、赤ちゃんのときにこの教会の中で洗礼を受けて、クリスチャンになったのです。そのころはまだ赤ちゃんだったので、もちろん洗礼の意味、キリスト教という宗教も分かるはずはなかったんですが、牧師である祖父は、私によく本を読んでくれました。また、牧師の書斎で遊ぶことが好きだったので、そのころから宗教、哲学に縁があったかもしれません。

7歳のときに、私の人生が変わりました。母がまだ37歳という若さで、急に癌で亡くなったからです。そのころはちょうど小学1年生でした。小学1年生の夏休みのときに、突然、お母さんはもう帰ってこないよと言われました。それからは、学校に行くと、学校から帰ると宿題をしなければならないのですけれども、どうせ人間は死ぬのに、なぜ宿題をしなければいけないのだろうかという疑問が、私の中にありました。

この疑問を父親にぶつけたら、父親はこう答えました「宿題しなくちゃ、いい成績は取れないよ。いい成績を取らないと、もっといい学校に進めないよ」。それを聞いた私は父親に対して、「でも、いい学校に進む意味は何だ?」と聞きました。「いい学校に行かないと、いい会社に勤めることはできないよ」と父親は答えました。

毎朝、仕事に向かっている父親の後ろ姿を見ていると、決してうれしそうに仕事に行っている感じではありません。それで父親に聞きました。仕事をしている意味は何ですか。それに対して父親は、「君を養うために決まっているじゃないか」と言うんです。それは、私にとっては全然答えになりませんでした。だって、父

親も死んで、私もやがて死ぬ。孫が生まれたとしても、孫だって死ぬ。そもそもなぜ生きているのだろうと思いました。人生の意味は何だ。それを父親に聞いたら、困った顔をして、それは学校の先生に聞いてみなさいと。

まあ小学生ですから、小学校の先生もちゃんと教えてくれません。まだ小学校では早すぎると言って、中学生、高校生になってから、こういう難しい問題を勉強するんだよと、先生たちは答えました。でも、生意気だから、先生たちも本当は分かっているのではないかと思いました。

同じクラスの仲間たちにこんな話をすると、「お前、変わったやつだな」と友達が言いました。「僕たちはそんなこと考えたこともない。そんなことよりも、一緒にサッカーをしようぜ」と、そういうふうに答えました。それで、ひょっとしてこういうことを考えているのは私が初めてかもしれない、誰も相手にしてくれないから、自分で考えるしかしょうがないと思って、考えて、考えて、やがて自分が何を考えたか、自分でも分からなくなってしまいました。

ドイツでは、14歳で献身の儀式をするのが普通です。赤ちゃんのときに洗礼を受けた者が、14歳になれば自分の頭でもう1回考え直して、自分の宗教を自分の意思で選択する。そういう大事な儀礼だと思います。

(しばらく英語を話して) ああ、日本語忘れました。すみません。ごめんなさい。もう頭の中で日本語と英語が。

ドイツでは24日、イブの日にサンタさんが来ます。そのときは、片手に大きな袋を持って、そこにプレゼントが入っています。もう片手には竹ぼうきのようなものを持っています。ですから、子どもたちは、プレゼントを持ってきてくれるかなというわくわく感と、下手をすると、この竹ぼうきでお尻をたたかれるかもしれない、要するに悪い子はお尻をたたかれるという2つの顔をサンタさんが持っているので、5～6歳のときに、わくわくしながら、びくびくしながら、サンタさんを待ちました。そして、実際に玄関をコンコンとたたく音が聞こえました。そして開けたら、白いひげを付けたサンタさんが外に立っていました。

「ネルケ君、君は今年1年、いい子にできたかね」と、サンタさんが私に聞きました。あまり自信がなかったので、小さな声で「はい」と答えました。横に母親が立っていたので、サンタさんは母親を見て、「お母さん、それはうそじゃないよね」と確認しました。そして、母親は難しい顔をして、「うーん。まだ改善の余地はあるけれども、まあ、今年は大目に見てあげましょうね」と、サンタさんに答えてくれました。そして、そのやり取りをじっと見ていると、あの白いひげを付けた

サンタは、実は隣の家に住んでいるおじさんだということに気づいてしまいました。あれが芝居だったんだということに気づいてしまったときから、人が死ぬと、いい人は天国に行けて、悪い人は地獄に落ちるという話も、ひょっとしてうそじゃないかと思うようになりました。

14歳で献身を受けるか受けないかという選択のときに、私はやっぱり献身をすることにしました。なぜかというと、多くのドイツ人はそうですねけれども、一応通過儀礼のような意味があるので、献身をすると親戚からプレゼントをいただいたり、お小遣いをいただいたりします。多いときは10万円、20万円ぐらいもらったりすることもあるので、献身しないと、まあそれだけ損です。もう一つ、皆さんご存じだと思いますけれども、献身をすると初めて聖餐に参加できます。Communionに初めて参加できて、パンとワインをみんなと一緒にいただけます。

日本ではどうも分かりませんが、ドイツでは14歳で実際に教会で初めてワインが飲めます。それは、法律でもちゃんと認められています。親の許可があれば、14歳からビールとワインは飲めるのです。ところが、献身しないと親は許可しないので、まだワインが飲めないのです。ですから、ワインが飲みたくて献身したという不純な理由もあったと思います。まあそういうわけで、いろんな不純な理由でクリスチャンになったわけです。

まだ自分の問題は解決されていません。なぜ生きているのだろうかという問題を抱えたまま、16歳のときに、キリスト教経営の全寮制の高校に入学しました。まあだいたい放課後は、この写真に写っているような感じでベッドの上に寝そべて、本を読んだりして、授業中はいつもこんなような姿勢で座って。ロダンの「考える人」みたいに。まあ、姿勢は決してよくなかったわけです。

ちょっと姿勢が悪かったというのもあって、学校で教えていた1人の先生が、私を坐禅サークルに誘いました。キリスト教系の学校だったのですが、実はドイツにはクリスチャンでありながら坐禅をする人も決して珍しくありません。しかし、私は16歳のときに坐禅のことを聞いたことがありませんでしたし、瞑想、メディテーションにも興味があまりなかった。むしろ何か新興宗教のような誘いではないかと警戒していたので、最初は僕は興味ないよと断りました。

そして、この坐禅サークルにはどうやら生徒が集まらないらしくて、2〜3週間たつて、再び先生から誘いがありました。2回も誘われるわけですから、なおさら怪しいと思って、僕はやっぱり嫌だと答えました。そのとき先生に、「じゃあ、君は今までやったことがあるのかね」と聞かれました。今まで坐禅をやったこと

があるのかね。私は、もちろんないよと答えました。今までやったことがないし、これからも全くやるつもりはないよと、そういうふうに応えました。それに対して先生は「一度もやらないで、なぜ嫌だと言えるのか」と私に言いました。一度やった上でないと言えないじゃないかと。その理屈にだまされて、1回でやめるつもりで坐禅サークルに参加したら、その結果として、きょうの私がここに座っています。

坐禅をして何がよかったかと聞かれると、初めて自分の体を発見した気がします。16歳の私に、君はどこにいるんだいと聞いたら、私はおそらく自分の頭を指して、僕はここにいるよと答えたとします。首より下の体は、これは単なる道具にすぎないと私は思いました。心臓や肺は、脳みそを生かすための道具としては必要であるけれども、本当の意味での私ではないと、私は思っていました。

坐禅をしてみず驚いたのは、姿勢が変わると何となく気分が変わり、周りの世界まで変わって見えるということでした。例えば16年間、息を吸って息を吐いて生きていたのですが、自分の呼吸を実際に感じた、意識したことはありませんでした。16歳のときに初めて坐禅をして、自分の意識を呼吸に向けて、私はこの吐く息、吸う息に生かされて生きているんだということを実感しました。体の発見からこの道に入って、結局1年間、毎回毎回坐禅に参加しました。

1年過ぎたときに、私を無理やりに誘った先生は定年退職で学校を辞めてしまいました。そのときに、「今度は君が責任者としてそのサークルを続けてくれないか」と私に頼んできたのです。そのとき初めて、仏教の教えとか禅の歴史について、もう少し学ぶ必要があると思って、学校の外にある町の市立の図書館に行って、禅についての本を片っ端から全部借りて読みました。例えばこの写真に写っている鈴木大拙さんの本のドイツ語訳などを読んだりしました。あるいは、日本の題名は『弓と禅』、英語では『ZEN IN THE ART OF ARCHERY』という、ドイツの哲学者、オイゲン・ヘリゲルが書いた本も欧米では非常に有名です。あるいは最近では、仕事に生かす禅とか料理と禅、こういう実用的な本も次々と出てきています。こういった本を読んで、坐禅はただ体だけではない、私にとっては体の発見は入り口だったのですが、坐禅は単なるボディーワークとは違って、精神的な次元もあるということに気づきました。

特に印象を受けたのは、お釈迦様の伝記でした。2500前にインドでお生まれになった王子が、王様になりたくない、自分の親に対して言ってしまったことです。この王子は、王様になったとしても、年を取って、病気を患って、死ななければいけない。結局は物足りない。いつも物足りなさに支配されるというか、いつも物

足りなさを感じながら生きるしかしょうがない。でも、そういう人生ではなくて、苦しみのない人生を送りたい。そういう思いから宮殿を飛び出して、菩提樹という木の下で坐禅をされたと言われていました。その若い王子が坐禅をして、はっと自分の苦しみから自由になったと言われていました。

この若き王子が後ほどお釈迦様と呼ばれて、ブッダとなったわけですが、私は、このお釈迦様に、初めて仲間に出会った気がしました。生きる意味で悩んでいるのは私だけじゃなかったんだと。そういう先輩がいるわけです。ただ勉強して、いい会社に勤めて金儲けをして、その人生ゲームでたくさんポイントを稼ぎたい。それだけじゃないんだと、私が初めて気づいたのではなくて、前々からこれに気づいた人がいるんだと、そのとき思いました。

そのころ、17歳のときでしたけれども、初めて自分がやりたいことを見つけました。この道を進みたいなど。鈴木大拙さんの本をたくさん読んでいたので、ほかの仏教国よりも日本に渡って、日本でお坊さんになりたいと、そのとき思いました。

高校を出てすぐに日本に行ってお坊さんになりたいと思いましたけれども、既に定年退職で学校を辞めてしまった先生を訪れて、その夢を語ると、あれだけ私に坐禅を勧めていた先生が急に責任でも感じたのか分かりませんが、ちょっと待てよと私を止めるのです。先生は、「今は君は熱心だけれども、そのうちつまずいてまたドイツに帰りたくなるかもしれない。そのときちゃんと仕事ができるように、まず大学で日本語を勉強して、ちゃんと資格を身に付けてから、日本に行くのがいいんじゃないか」と、そういうふうに勧めてくれました。

高校と大学にちょっと時間があつたので、昭和で言えば62年、西暦で言えば1987年に初めて日本に来て、3カ月間、栃木県の宇都宮市でホームステイをさせてもらいました。そのときは、たくさんの方の日本のクリスチャンの方にもお世話になりました。宇都宮市のYMCAとか群馬県のYMCAのキャンプで、夏の間働いたりしました。私を受け入れてくれたホームステイ先も実はクリスチャンホームでした。おそらくこのご家族は、ルターの国であるドイツから来た若い青年に、プロテスタントの本場の話を聞いてみたいと期待したと思います。ましてや私の祖父は牧師ですし、私も教会の中で育っていましたから。でも、私は逆に仏教が知りたくて、坐禅がしたくて日本に行っていたので、互いにちょっとがっかりしたと思います。

例えば鈴木大拙さんには『禅と日本文化』という本もあるのですが、その本によれば、日本の文化はもう全体的に禅の影響を強く浴びて、坐禅することだけで

はなくて、例えば書道ですとか、お茶の文化ですとか、生け花の文化、あるいは尺八のような音楽も、禪の精神を表している。そんなことが書いてありました。それで、尺八の音を聞きたいとホームステイのファミリーにお願いしたら、若い君にこれから本物の音楽を聞かせてあげようと言われました。そして、そのときホームステイ先のお父さんがレコードプレイヤーにかけたのは、バッハのレコードでした。そうして、互いにちょっとがっかりしたというか、求めるものが違っていたのですけれども。

2カ月ほど宇都宮のクリスチャンホームでお世話になったあとに、宇都宮市にあるお寺に2泊ぐらいさせてもらいました。2泊3日。今私が共有しているスライドは宇都宮市のお寺ですけれども、そのお寺は禪宗ではなくて浄土宗です。念仏して阿弥陀さんに救っていただくという宗派です。しかし、私はどうしても坐禅をしたくて日本に来たわけですから、念仏だけでは物足りないと感じて、この写真では上の部分しか写っていないと思いますけれども、京都方面と下手くそな漢字で段ボールに書いて、この段ボールを持って高速道路の入り口に立って、トラックの運転手さんに拾ってもらって京都までヒッチハイクをしました。

京都には禅寺はたくさんあります。500円ほど拝観料を払えば、きれいな石庭、石でできたお庭なども観光できますけれども、坐禅をさせてくれるお寺は一つもありませんでした。そのときはちょっとがっかりしましたけれども、一遍ドイツに帰って大学で日本語を勉強してから出直そうと決めました。

2回目に日本に来たのは22歳のとき。平成2年ですから、1990年です。そのときは京都に留学しましたけれども、京都の近くの禅寺に毎月坐禅をしに通いました。この写真に写っているのはそのときお世話になったお寺ですけれども、通いだけではなくて、半年ずっと修行僧たちと一緒に生活したいという話を、このお寺、この写真の真ん中に写っている和尚さんにそういう話をしたら、それだったら安泰寺に行ってみなさいと言われました。

安泰寺という寺は兵庫県の北側、日本海側にあります。ちょうど今から31年前に初めてそこに登ったのです。最寄りの駅から20キロぐらいバスに乗って、最寄りのバス停から山を登ること4キロくらいです。着いたときは、汚れました。ちょうど台風の後だったので、この細い山道もほとんど泥、川のような道を登ったので、着いたときはもう泥だらけでした。なので、お寺に着いたらまず五右衛門風呂に入れてもらえました。そして、五右衛門風呂を出たら、この写真に写っている住職にお茶に呼ばれました。

そのとき、お寺の住職に聞かれたのは、「おまえは何をしに安泰寺に来たのだ」。それに対して私は、「仏教を勉強したい。坐禪を学びたい」そういうふうに応えました。それに対して住職は、「ばか！ここは学校じゃない」と答えました。おまえが安泰寺をつくるんだ。私はまず驚きました。おまえが安泰寺をつくるんだ。まだ22歳のドイツの留学生在が、どうしたらこの安泰寺をつくれるのだろうか、びっくりしました。

おそらく住職が言いたかったことは、例えば半年という短い期間であっても、ここで何が見えるか、何が見えないままなのかは君次第。君の態度次第。そのつもりになれば、たくさんの方が学べるし、そのつもりにならなければ、ただ無意味に時間が流れてしまうだけだ、ということだと思います。

仏教では仏道という言葉を使います。仏の道という言葉を使いますが、キリスト教のほうでも、イエスは「私は道であり真理であり」というふうに言います。この道というものはどこにあるかという、いつも自分の足元にあるということだと思うのです。そして、自分がまず一歩前に進まなければ旅が始まらないわけです。

私がお寺に来て少し疑問に思ったのは、キリスト教はご存じのように神様は一つ。そして、イエス・キリストという救済主も一人しかいないのですが、仏教には実は仏や菩薩がたくさんいます。仏もあれば菩薩もあります。この写真には文殊菩薩、知恵の菩薩が写っています。実はトイレの前にもトイレの神様。もちろんトイレの神様はキリスト教の神様とはちょっと違います。守り神のようなものがトイレにもあって、お風呂にもそういう神様があったり。神様というか菩薩です。菩薩があります。また、この壁から見守ってくれるのは観音さんです。慈悲の菩薩です。西洋人が観音さんを見ていると、何か聖母マリアにすごく似ている、驚くほど似ているような表情とか、赤ちゃんを抱えているのもそうです。そして、どこの仏教のお寺にも、本堂に本尊と呼ばれるメインの仏がいます。

そこで私は住職に聞きました、安泰寺の本尊、安泰寺の本当の仏は何仏だと。それに対して住職は、何仏でもいいじゃないかと答えました。おまえがここにならなければ、仏はどこにもいないぞ。キリスト教では、どんなに頑張ってもイエスになることはできませんし、ましてや神様になることはできません。そこにちゃんとした線が引かれていますけれども、仏教の中では、特に禅宗は、生きながら仏になるということを強調しています。誰でも坐禪をすれば仏になれると言います。ですから、私は、よそ者、よそにあるのではなくて、おまえが仏にな

れなければ駄目だという、そういう話でした。安泰寺にいる皆さん一人一人が、自分の置かれた場所で、仏のような、菩薩のような生活をすれば、誰でも仏になれるという、そういうことだと思います。

仏教の教えによれば、人間だけではなく一匹の虫でも仏になれるし、カエルでも座れば仏になれると言われていました。でも、人間はカエルではないので、座ることだけが修行ではなくて、生活全ては道だと言われていました。掃除、庭の仕事もそうですし、安泰寺は広い土地を持って、そこで畑や田んぼを耕して自給自足の生活を営んでいますけれども、この自給自足も修行の一環と見なされています。5月には田植えをして、秋には稲刈りをする。そして冬に入る前は、サトイモなどいろんな野菜を収穫して保存する。お風呂はまきで沸かしていますし、台所もかまどはまきで料理するので、まき割りも大事な仕事の一つです。

この写真は30年前の私と先輩です。おそらく11月の初めごろです。これは11月の中旬です。11月の終わりになると大体初雪が降りますが、日本海側はこの冬型の天気に入ると、ほぼ毎日雪が降るので、お正月ごろには、もう屋根の近くまで雪が積もったりすることもあります。ここで見られるように、どんなに雪かきしても雪が捨てられないほど。そして、冬の間は郵便物も届きません。最寄りの民家は5キロ離れていますけれども、月に1回ぐらいかんじきで、12月から3月の間は自力で郵便物を取りにいかないといけません。子どものときは雪遊びが大好きでしたけれども、安泰寺では命懸けです。

これは部屋の中の風景です。かまくらにしているような感じですね。

冬の間は、一つの広間だけにまきストーブを置いて、このまきストーブを囲んでお茶を飲んだり食事をしたり、そして毎日勉強会も開いております。

22歳のとき初めて安泰寺の生活を半年だけ経験しましたけれども、一遍ドイツに帰ってから、25歳のときは大学も終えて、今度は本格的な修行をするために再び安泰寺にあがって、出家をしてお坊さんになりたいという願いを、安泰寺の住職にしました。それで弟子入りさせていただきました。欧米よりも日本では上下関係を非常に大事にし、先輩が後輩を教えて、後輩が先輩の言うことを聞かなければいけない。そういう秩序がしっかりしています。それについてだいぶ疑問もあつたりして、悩んだりしました。最初によく言われたのは、まず自分を型にはめなさいということだったのですが、私はどうやらいつも角が立っていたらしいのです。

最初は、おまえが安泰寺をつくるんだと言われたけれども、実際は集団生活ですから、いかに自分を集団の中に組み込めるか、それでだいぶ苦労しました。そ

して、よく先輩たちに怒られもしました。一番苦労したのは、台所の当番でした。安泰寺では5日交代で当番が替わります。5日間、皆さんのために、朝4時に起きて、6時にみんなが朝ご飯を食べられるように、まきをかまどにくべて火をおこして、火の上で主食の玄米ご飯、そしてみそ汁、そして畑から採った旬の野菜で2品ほどおかずを作ります。これが朝ご飯です。

日本人にとって食べることは非常に大事ですから、味付けなどでよく注意されたりしました。最初の日の朝ご飯は何とかなったのですが、昼ご飯でつまずきました。昼ご飯は作業の合間に食べるので、もっと簡単なめん類などのご飯が出ることが多いのですが、初日には乾麺でうどんを作ってみなさいと言われてました。最初は、うどんを知らないものですからスパゲティのアルデンテのつもりで作ったら、硬すぎるとあとで怒られました。次の日は柔らかくしてやろうと思って30分ゆがいたら、おかゆになってしまいました。

ほぼ毎日、料理のことで怒られてばかりなので、しまいに私は「僕は何も料理の勉強をしに日本に来たんじゃないよ」と反論しました。それを聞いた師匠は「おまえなんかどうでもいい」と怒りました。それは当たり前と言えば当たり前です。修行中の者ですから、自分の自己主張を言うてはいけないのですが、私は師匠は矛盾しているのではないかと思いました。私はそこに矛盾を感じたのです。最初は「おまえが安泰寺をつくるんだ」と言っていながら、今度は「おまえなんかどうでもいい」。私が安泰寺をつくるのだったら、私がどうでもいいはずはないのではないかと。

でも、しばらくたって納得しました。安泰寺に仮に10人いれば、10人がそれぞれ自分だけの安泰寺をつくってもらっては困るのです。あるいは10人が10人とも「俺は仏になるんだ」と頑張ったとしても、けんかになるだけです。むしろ自分を手放して、自分を忘れて、初めて安泰寺がつくれるのです。おそらく師匠から学んだ一番大切な教えは、この2つだと思います。おまえが安泰寺をつくるんだ。でも、おまえなんかどうでもいい。この2つだと思います。

33歳のとき、最初に安泰寺に来て10年以上たったところに、師匠のもとを離れてゆくゆくはドイツに帰るつもりでおりましたが、まず日本の大都会で坐禅の実践を広めたいと思いました。ところが、大阪は家賃が高いことに気づきました。自分の住む場所すら確保できない。どうしようと思ったときに、大阪城公園をぶらぶらと散歩したら、あちらこちらにプルシートを張ってたくさんのホームレスが住んでいました。

そして、ホームレスたちの生活を見てみると、「ああ、こういう手があるんだ」と見習いをしようと思って、私も公園でこのような形でブルーシートを張ってテントを立てて、その中で寝泊まりしながら、朝は外でござを敷いて、ござの上で坐禅をしました。そして、昼間はインターネットカフェに行って、そこで初めて自分のホームページを立ち上げました。「33歳のドイツ人が毎朝公園で座っています。一緒に座りませんか」と声を掛けたら、参加者も少しずつ増えました。

2カ月ぐらいたったころ、冬が近づいたときに、テントの代わりにこんな小屋まで建ててしまいました。ちょうど大坂城の堀の縁、見晴らしのいいところに、こんな立派な仏家を建ててしまいました。そのときに、公園管理局がこの仏家の入り口にこういう告知を貼りました、至急撤去しないと、大阪市のほうで処分しますと。しかし、見渡すと、ほかのホームレスたちのテントにも似たような紙が貼ってあって、ホームレスの先輩方に相談すると、「心配しなくていいよ。定期的にこんなビラは貼られるけれども、それを剥がしたら、また半年ぐらいはほっとかれるよ」と教えてもらいました。それを聞いてだいぶ安心できました。肩書がホームレスでも、気分は豊臣秀吉のようでした。

非常に楽しい毎日でした。少なくとも2～3年ぐらいはここで生活したいと思いましたが、平成14年(2002年)2月14日、師匠が亡くなったという連絡がありました。ちょうど2月14日にその連絡をいただいて、安泰寺に戻りました。お葬式に先輩たちから「私たちは今すぐには安泰寺に戻れないから、まず春までおまえが留守番してくれないか」と言われました。

私は最初このアイデアはあまり好きではありませんでした。2月14日と言えば、仏教と何のゆかりもないんですが、バレンタインデーじゃないですか。実はそのとき大阪で付き合った若い女性がいました。本当は大阪に戻って彼女とバレンタインデーを過ごしたかったのですが、先輩にそう言われると仕方なく、「はい、分かりました。春までは留守番をします」と答えました。

師匠の百箇日のときには先輩たちが集まって、安泰寺の次の住職を決めようとうと。でも、みんな嫌だと言ったから、じゃあ、このドイツ人にさせようかという話になりました。それで、大阪でずっと待ってくれた彼女に、まだ付き合って6週間しかたっていないのですが、プロポーズをすることにしました。一緒に山寺に来て私の妻になってくれないかと、彼女に聞きました。優しい彼女は「頑張るわ。無理かもしれないけれども、頑張ってみるわ」と答えてくれました。今は力が逆転して、非常に強い妻に成長しました。

わりとすぐ子どもが2人生まれて、この2人はもう今は高校生になって、全く私の言うことを聞かなくなっていました。ちょっと離れて3番目の息子もいます。2番目の息子、3番目の子どもですけれども、彼は今小学生です。

私の下で、出家して私の弟子になった人は20人ほどおります。彼らには、私が師匠から学んだ「まずおまえが安泰寺をつくるんだ」と、そして「おまえなんかどうでもいい」、この2つのことをまず教えます。それから、よくキュウリのように育ちなさいということも教えているのです。安泰寺でキュウリを育てるときには、1本のひもを垂らして、その下にキュウリの苗を植えます。そうすると、キュウリは自らこの1本のひもをつかんで、自力で真っすぐ上に伸びてくれます。この1本のひもは、仏教で言えば仏の教えですか。キリスト教で言えばイエスの言葉、福音はこの1本のひもだと思えます。それを自分自身のこととして、自らつかんで成長してほしい。ところが、私の日本人の弟子に特に多いと感じますが、トマトのような弟子もいるのです。

福音ですか。イエスの言葉ですね。

特に日本人に多いのはトマトです。頑丈な支柱がないと倒れてしまいます。ですから、何日かおきにひもで支柱に結ばないと、トマトは自分で自分を起こす能力はありません。また雨に弱いので屋根も作らないといけないうし、余分な芽を摘まないと緑ばかり茂って実がなりません。夏に実がなると、キュウリ以上にトマトはおいしいと思うのですが、とにかく手間が掛かります。主体性があまりないです。

ヨーロッパやアメリカから来た弟子たちは、ではみんなキュウリかと言うとそうではなくて、むしろカボチャに近いのです。最初の二葉が出たときはキュウリにそっくりですけれども、カボチャはあの1本のひもを無視して、そこら中に「俺が、俺が」と言ってつるを伸ばして、下手をしたら隣の野菜まで殺してしまいます。カボチャは自分を忘れることができないのです。自分を手放すことができません。

そろそろ終わる時間ですが、ここから結びます。安泰寺で大事なことは、まず自分から出発することです。私の修行であって、私の道です。私が安泰寺をつくるのだということですね。自分がブツダ、仏を目指さなければいけない。ところが、一歩間違えてしまうと天狗になってしまっ、25年前の麻原彰晃のようになってしまう危険があります。

自分を手放す、自分を投げ出すことも、また大事です。作業のときもそうですし、坐禅のときもそうです。本当は坐禅して偉くなる、仏のようになるのではなくて、坐禅は自分を委ねる、自分を手放す。私が坐禅をするのではなくて、坐禅が坐禅

をする。そういう行為です。

ひょっとして、私はキリスト教のことはよく分からないのですが、坐禅と祈りは近い部分があるかもしれません。キリスト教のことをよく知らない人は、まるで子どもがサンタさんに欲しいものリストを書いているように、「神さん、これをください。神さん、これをください。神さん、私はこれだけ立派なことをしたので、ご褒美をください」ということを祈るかもしれませんが、これは本当の祈りではないと思います。むしろ神様の前でただ黙って、黙って、むしろ神様の話を聞くことが本当の祈りではないかと思ひます。そういう方向転換はおそらくどこかあると思ひます。今までは私が神様から頂戴、頂戴と言ったものが、黙って神様の前で、ただありがとうと言う。そういう方向転換は坐禅においてもあるのです。それまでは、早く仏になりたい、になりたい、になりたいと思ひたものが、ただ坐禅に任せて坐禅に感謝する。そういう日が来たりします。

その方向転換が起こると、まるでこの写真の、子ガモが親ガモの背中に乗っているような、そういう安心感を味わうこともできます。自分で頑張るのではなくて、もっと大きな力に乗せられている、守られていることを実感します。そして、それを味わって初めて周りの者にも優しくなれる。キリスト教では隣人愛は大事にします。仏教のお経の中にも、生きとし生けるものをわが子のように慈しみなさいというふうに書いてあります。

では、最後に入ります。今は大阪におりますけれども、去年までは安泰寺でみんなと同じ釜の飯を食べ、同じ釜の風呂に入って、切磋琢磨し、いろいろな言葉をしゃべる異質な者がぶつかり合い、切磋琢磨されましたけれども、今は、この写真では左から3番目の背の低い女性にバトンタッチし、今度はまた日本人の女性ですけれども、住職をして、同じような国際色豊かな安泰寺が続いております。私は再び大都会で坐禅会をしたり講演会をしたり、きょう皆さんとこのZOOMを使って触れていますけれども、そういうことも最近多くなっています。なので、またいずれかの機会で、こんな形でつながることがあるかもしれません。そのときはまたよろしくお願ひします。

(本稿は、2021年10月22日に行われた山上国際学寮主催「市民公開講座」での講演内容です)